



ガラスの球根 - やがて土に還る (としても) -

土の中に興味がある。

冬眠する熊、夏のひんやりとした土。
その快適さを建築が享受することを考えてみる。地下空間はそれを可能にしているか疑問だった。

ガラスを使って「土の中」を提案する。
耐圧ガラス、あるいはガラスブロックで球根の形の空間をつくる。それを頭が少し出る程度に土に「植える」。

露出した部分は、そのまま光や空気を取り入れる外とのインターフェイスとなる。
「球根の頭」はあるときは落ち葉を着飾るだろうし、雪を纏うこともあるだろう。
光に照らされたことにより、地下でも大地との接点が可視化する。
それは暗い地下ではなく、やさしい「土の中」という感覚を呼び起こしはしないか。

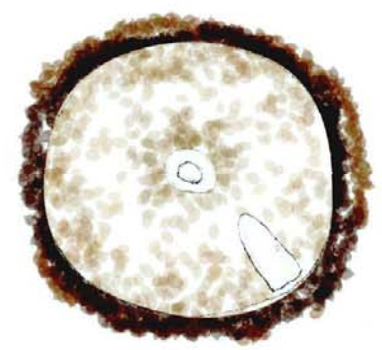
何代もの人が通りすぎていき、いつか忘れ去られる日が来るだろう。
その時ガラスの球根は、やがて土に還ることになるのである。



土の中に雨が降るのをはじめてみた



ほんのり温かいガラスはどんな感触だろう



季節や天気によって外との境界がうつりゆく



根っこやモグラとの邂逅は、子どもには驚きで彼らにとっては少し眩しいかもしれない